

# マルクスとガロア

伊藤 眞作

「マルクス」は「ガロア」を理解し得るに足るに十分なほどの頭脳を持っていたのではないだろうか。

これが、いま閃いたばかりの仮説です。周知の如く、マルクスには著名な『数学手稿』として厳存している。

マルクスの「数学」についての関心と、そのレベルの高さを示すものとして、その度ごとに共感させられる。

しかし、彼の著作の中に、かの天才少年ガロアに関する記述は、まったく見出すことはできない。それもその筈、ガロアは、女性を巡る血闘で世を去る前夜、徹夜で、彼の発見した「新しい数学」のエッセンスを、数枚のワラ半紙の表裏ビッシリと書きのこし、大家さんに「これを大切に保管しておいて下さい」と、呉々も頼み込んだうえ、死に赴いたという。それが発見され、数学界が大騒ぎになったのが凡そ百年後で、そのためガロアは「数学の歴史を百年おくらせた男」の異名さえ持っている位だ。だから、マルクスが何も知ら

ないのも、全く当然である。

問題は、「マルクスが、この未知な天才数学者ガロアの発見による「新しい数学」を理解するに足りる、十分な「頭脳」を、当時、所有していたか否か」の考察に帰着する。

その前に、ガロアの発見になる「新しい数学」について、もう少し深く立ち入っておく必要がある。それは、今では「抽象代数学」という名前で呼ばれている。

この二百年ほど前に発見された数学の諸分野への応用が多様となり、その「抽象性」から、数学とはかけ離れた思いも掛け無い諸分野にまで潜り込み、既に様々な実用化の試みの真最中なのである。それは本拠地の「数学」に於いても同様で、例を挙げれば、岩波書店から出ている『岩波数学辞典』の21世紀版は、これまでと趣を一変させ、「抽象代数学」の知識なしには、一頁たりとも読解不可能な編集になっているほどである。

こう切り出すと「抽象代数学」は、いかにもイカツメラシイ存在に見えてしまうが、然に非ず、一例を挙げれば、「0を基にした加減算」と「1を基にした0を除いた乗除算」との二つの集合との間に、何等かの関連があるのでないか、と考えたりする分野の数学で

ある。いろんな分りやすい、具体例の豊富な参考書が  
いっぱい出ているので、図書館へ行った折にでも相談  
してみて下さい。

この「抽象代数学」の醍醐味は、これまでは、全く  
別物と見做され、当然、別扱いで済まされて来た二つ  
の分野の間に、実に近い位置関係にあることが判明し、  
その体系を細かく照合して行った結果、思わぬ発見が  
あつたりして、実に楽しいものである。

そのためには、完全な合同関係を探るよりも、もう  
少し条件を緩めた「準同型写像」の方が、類似の体系  
を見出す能力に長けている。「核」とは「加減算」の  
0、「乗除算」の1の仲間イチのようなものと思つてくだ  
さい。準同型写像の仲間では、意外なものが顔を出す。

つまり、「準同型写像」とその核とは、簡単に言っ  
てしまえば、ある意味では、X軸、Y軸、原点Oオに類  
似する座標系を探しまわることも、当然含まれている。  
以上を予備知識として、マルクスの「頭脳」と、天  
才少年ガロアの「頭脳」との間に於ける「抽象代数学」  
的要素に於て、どれ程の「共通性」を所有しているの  
かを検証する。

それは次の手順で行う

第一、私の発見した数式、すなわち「分数の割り算」

とヘーゲル「大論理学」（本質論）の中に存在  
している〈反省諸規定〉との間に、「準同型写  
像の核」が成立しているかどうかを検証する。

第二、〈反省諸規定〉と「固有の周期」と、ヘーゲル  
「小論理学」§81に存在している「内在的超出」。  
この三者それぞれの上に「準同型写像の核」が  
成立しているかどうかを検証する。

第三、「内在的超出」と、私の体験した「ドレイ労働」、  
「不治の病を意識することなく敢行してしまつ  
た、私の票読み活動」との間に、「準同型写像  
の核」が成立しているかどうかを検証する。

第四、（第一〜第三、までの全て）に対して、マルク  
スの有名な、「フオイエルバッツハターゼ」が、  
「準同型写像の核」を成立させているかどうか  
を検証する。

以上、第一〜第四までの全てに対して検証を行った

結果、第一〜第四のあらゆる段階に於て、常に「準同

型写像の核」の概念が貫かれている。これは「マルクスの「頭脳」は、ガロアの「頭脳」に存在する「抽象代数学」の概念を共有していた、という冒頭に閃いた仮説を証明するのに十分な確かな証拠である。

注目願いたいのは、第三の段階だ。

「内在的」に育てあげて来たからこそ、ついに「超出」を引き起こした、という、私の実践は、「唯物論」が成立するに足る必要十分な根拠を成しており、だからこそ、次の第四の段階の有名な「フォイエルバッハテーゼ」となって結実しえたのだと思う。

つまり、マルクスは、世間に未だ知られていなかった「抽象代数学」の概念を縦横に駆使し得たからこそ、かの有名な「フォイエルバッハテーゼ」が生まれたのではあるまいか。いろんな立場からのご意見を、お待ち申し上げます。(22年12月25日)